

FAS 禅について

藤 吉 慈 海

FAS 禅とは、京都大学文学部教授であった久松真一博士（抱石庵と号す）を代表とする FAS 協会（F. A. S. Zen Institute）によって、挙揚されている禅そのものである。FAS とは、この協会のモットーである、

To awake to Formless self

To stand on the standpoint of All mankind

To create Superhistorical history

Formless self の F ㄴ All mankind の A ㄴ Superhistorical history の S を組み合わせたものである。このモットーは、

無相の自己にめざめる

全人類の立場に立つ

歴史を越えて歴史をつくる

という意味であるが、禅は先ず「無相の自己」すなわち「形なき自己」にめざめることを第一要件とする。「形なき自己」とは肉体的な形をもった自己でもなく、また精神的な形をもった人格とか自己意識というようなものでもない。そのよう

な精神的にも物質的にも形のない自己、それこそが「真実の自己」である。禅でいう「生きた無」とか「空」とか「自性」というものが、正しくそれにあたる。したがって、「自性真仏」といわれるように、そのような無的自性、無我的自己、無的主体、空の自己が真の仏であって、それにめざめることが先ず大切である。そのような無的主体性を確立することが禅の第一義であり、禅の目的とするところである。FAS 禅の基本的立場もまたそこにあって、F すなわち「形なき自己」にめざめることが第一条件である。もし「形なき自己」にめざめることを主張しない禅があるとしたら、それは本当の禅ではなく、また仏教とも言えないであろう。「形なき自己」すなわち無我的自己が、いかに生き生きと自覚され、それが私自身においていかに力強く働いているかに禅の本質があると言えよう。そのような意味で FAS 協会は先ず第一に F すなわち「無相の自己」にめざめることにつとめ、またそれを他にもすすめるのである。

第二にAすなわち全人類の立場に立つということは、仏陀がすでに一切衆生を教化の対象とされたように、仏教の立場はつねに人種国家の差別を越え、全人類の立場に立っている。仏教の歴史を顧ると、時には国家権力と結びつき国家仏教の観を呈したこともあったが、元来仏教は世界宗教であり普遍的宗教であるから国境を越え各地に伝播した。禪にしても、時には興禪護国を標榜し、国家主義と結びついたこともあったが、「形なき自己」にめざめた真の禪者は、自ら全人類の立場に立ち、人種の差別や、国家・民族・階級のエゴイズムを超えているべき筈のものである。まさに「形なき自己」にめざめた人は、全人類の立場に立つ、それが本当の禪である。

第三に歴史を超えて歴史を造るとは、われわれは現実の歴史の社会に生きているが、真の禪者は歴史を超越した一面がなければならぬ。歴史的現実拘束されず、歴史を越えた立場から歴史をつくって行くものでなければならぬ。禪者は十二時を自由に使いうるものである。時間空間に拘束されず、時間空間を自由に使いうるものでなければならぬ。能動的無とか主体的無と言われ、さらに創造的無と言うのは、そのような無的主体としての禪者の自由なたらきを代表する言葉である。歴史的現実の世界に生きながら、それに拘束されず、歴史を自由につくり出すことができる人、それが本当の禪者である。したがって真の禪者は歴史的現実の客観的把握に対

し、鋭い清浄分別智を持っていなければならぬ、仏の十号に世間解 Lokavidu とあるのも、その意味である。そうでないと歴史の進むべき正しい方向を見定めることはできない。

FAS 協会は『FAS』という機関誌に続いて一九七二年に『ポストモダニスト』誌第一号を発刊しているが、その中で久松抱石居士は『空』と題し、

空軸を中樞にして無礙自在、久遠・遍界めぐる法輪

形なき自己に覚めて不死で死し、不生で生れ三界を遊戯

今しFAS歴史・宇宙に伏蔵し、ポストモダンの時代創定めん

という短歌を発表し、同誌は「F (Formless self)・A (All mankind) S (Superhistorical history) に つ い つ」と題し、次のような批判的短文を掲げている。

「神信仰を律する中世的な神律と、近世的な理性の自律が、ともに問題化した近代のニヒリズム状況は、神信仰に基づく自己理解・世界理解・歴史理解と、理性に基づくそのいずれをも許さない、自己・世界・歴史の後近代的な死復活を要求しているといえるであらう。特に、現代におけるニヒリズムの現実形態ともいうべきテクノロジーの人間支配の只中で、自己の無と世界の無と歴史の無に直面して、吾々は『どうしてもいけないとすればどうするか』という、のっぴきならぬ基本的公案を課せられているともいえるであらう。後近代的な自己・世界・歴史の自覚は、この『どうしてもいけな

いとすればどうするか』という基本的公案に対する神律的他律と理性的自律の葛藤を超えた抜本的絶対的自律の葛藤の落着である、新しい宗教律に基づいた自己の体と、世界の相と、歴史の用の全一的な自覚でなければならぬ。吾々の協会が提唱する『FAS』とは、上述のごとき意味での自己・世界・歴史のいわば体大・相大・用大的自覚に他ならないのである。」

さらに「A提言——更衣——」と題し、「F抱石」の名において、「近代的国家主権の倫理、政治、経済では、世界史的現実の緊迫してくる新課題を、もはや背負ひきれなくなった。すべからく国家は、抜本的に主権を全人類に転讓し、主権在全人類——Ethic, Polity, Economy of Allmankind, by Allmankind, for Allmankind——のポスト・モダン体制を創建すべきである。五百年モダン衣裳は着ふるしつポスト・モダンに衣更へせん（一九七〇年十月）」とある。さらに「ポストモダニスト宣言 The Postmodernist manifesto」として、三つの宣言がなされている。

一、ポストモダニスト自覚 (Postmodernist Awakening) 近代の本質的矛盾と現象的デレンマによつて崩壊した主体性を、F. A. S. 覚哲学に基づくポストモダニストの自覚により建て直す。

二、最高主権在人類 (The Ultimate Sovereignty Rests with

FAS 禅について (藤 吉)

All mankind) 宿命的に行きづまった多元的国家エゴイズム体制を、抜本的に超脱して、普遍的な一元的全人類主権を創定する。(Ethic, Polity, Economy, and Culture of, by, and for All mankind)

三、全人類共財 (The Communalization of All material and Spiritual Wealth by All mankind) あらゆる物質的精神的資財を、国家独占から解放して、全人類の共財にする。

禅の実践と研究を主とする団体から、このようなFAS的自覚が生まれ、右に示したような宣言がなされたことは、注目すべきことである。伝統禅の歴史を顧みると、戦時中は国家主義的な発言をしたり、皇道禅を称えた人もいたが、終戦となると鳴りをひそめてしまった。随処に主となることを主張する禅は、主体性を喪失してはならぬが、FAS協会がFの自覚にとどまらず、A・Sの方向に動きを示めたことは、従来の伝統禅がFの方向のみに止まっていたのに対し高く評価されねばならぬ。

因みにFAS協会は昭和十九年四月八日、京都帝国大学学道々場として、洛西花園妙心寺山内春光院の奥にある久松真一博士の寓居抱石庵において出発した。その綱領は、

一、本道場は絶対の大道を学究行取し、以て世界甦新の聖業に参ず。

一、本道場は宗教上思想上の固陋なる因襲に墮し、又は皮

相安易なる追隨に奔ることなく、よく現実の深底に徹し、自主妙底の大作を發す。

一、本道場は偏学の無力、偏行の盲目を誡め、学行一如大道に驀直向す。

一、道人は順逆境中不拔の道念を堅持し、道場日には必ず参じ、以て道場の紹隆を期す。

というのである。最初のメンバーは十名位であつたが、次第にその数を増し、端坐と論究を主とする学道が続いた。戦後、京都大学の枠をはずし、一般の会員の参加を求め、妙心寺山内東海庵において第一回の別時学道を催してから、すでに八七回に及んでいる。平常道場は毎週一回、土曜日の夜、端坐と論究を主とし時には古典の輪読をしている。学道の方法も師家に独参する形式をとらず、相互参究という方式をとり、会員が対坐して互に真実の自己に参究し合っている。

学道々場は久松博士の外遊後、FAS 協会と改称し、機関誌も『風信』から『FAS』誌に發展し、さらに『ポストモダニスト』誌を以文社と提携して発刊するにいたっている。会員数は現在百七十八名、誌友数約五百名で、一つの団体としては大きくはないが、着実な求道の歩みを続けている。学問的にも久松真一・西谷啓治両博士指導の下に、ロックフェラー財団の援助のもと、研究会を組織し、その成果を『禅の本質と人間の真理』(創文社刊)として発刊し、近年は「後近

代社会の理念と構造」につき研究を推進している。『久松真一著作集』も全八巻のうち七巻を発刊し、さらに続巻が予定されている。

FAS 禅は、その AS 的活動に中心をおけば、政治団体と誤解され、F のみに専心すれば既成の伝統禅と何等異らなくなる。F と AS とが密接に関連し合つて、現実の深底より AS の活動をなすところに、その特質が見られる。FAS 協会がかつて『人類の誓』を宣言した。それは、「私たちはよくおちついて本当の自己にめざめ、あはれみ深いところをもつた人間となり、各自の使命に従つて、そのもちまへを生かし、個人や社会の悩みと、そのみなもとを探り、歴史の進むべき正しい方向を見きほめ、人種国家貧富の別なく、みな同胞として手を取りあひ、誓つて人類解放の悲願をなしとげ、真実にして幸福なる世界を建設しませう」というのである。このような誓いを宣言し、その根本的立場を一般に理解しやすくしているところにも、禅の現代性が見られ、ユニークな宗教的活動面が窺われる。その『ポストモダニスト宣言』も、『学道々場綱領』から『人類の誓』へと展開して来た、この団体の当然の主張であつて、つねに現実の世界の動向に目を注ぎ、そのあるべき方向を指示しているところに、FAS 哲学の自覚の深さと確かさが見られると思う。